

市長記者会見記録

日時：2020年12月22日（火）14時00分～14時40分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：令和2年度「かわさきマイスター」を認定しました（経済労働局）
市政一般

<内容>

《令和2年度「かわさきマイスター」を認定しました》

【司会】 ただいまから、定例市長記者会見を始めます。

本日の議題は、令和2年度「かわさきマイスター」を認定しましたとなっております。

それでは、福田市長から、マイスター認定者の発表と御紹介をさせていただきます。

市長、よろしく願いいたします。

【市長】 それでは、令和2年度かわさきマイスターに認定いたしました4名の方々の御紹介いたします。

本市では、市民生活の向上や産業の発展を支える優れた技術・技能の振興・継承を目的として、平成9年度に、かわさきマイスター制度を創設し、毎年、公募により候補者を募り、特に優れた技術・技能をお持ちの方を市内最高峰の匠、かわさきマイスターとして認定しております。

今年度は12名の方々から御応募があり、かわさきマイスター選考委員会において慎重な審議を行っていただき、本日御出席いただきました4名の方を令和2年度のかわさきマイスターに認定いたしました。今年度の認定者4名を加え、これまでに75職種109名の方々がかわさきマイスターの認定者となりました。今後も本市の技術・技能の発展のためにお力添えをいただきたいと思います。

マイスターに認定した方々の職種は様々ですが、共通していることは、卓越した匠の技を保持されているだけでなく、自らの技術・技能の継承や後継者の育成にも日々積極的に取り組まれているところにあります。

それでは、4人の方々につきまして、50音順に御紹介を申し上げます。

初めに、小林政春さんでございます。職種は造園技能士となります。

小林さんは、高津区子母口にあります株式会社小林植木の代表取締役会長を務めておられます。様々な樹木の特徴を熟知し、その庭に合った樹形になるように剪定を行

うことができる技能者です。樹木の頂上の位置や左右の幅を見て、樹木の内部まで日光が当たるようにすることで、新芽が出るように剪定することを得意とされており、個人邸宅の庭造りの仕事から、企業の工場の緑地管理など、幅広いフィールドで御活躍をされておられます。

続いて、清水達也さんでございます。職種はプラスチック塗装になります。

清水さんは、川崎区浅野町にあります有限会社坂本塗装工業所の代表取締役でいらっしゃいます。工業塗装の分野でも、とりわけ薄い膜厚を要求されるプラスチック塗装において、高い品質の塗装を施すことのできる技能者でいらっしゃいます。多くの事業者がロボットを使用する中、自らの手でスプレーガンを持ち、高級車の内装品などに用いられるピアノブラック塗装など、難易度の高い塗装を手仕事で仕上げることのできる方でいらっしゃいます。

続いて、須山守さんです。職種はそば職人となります。

須山さんは、川崎区大師町にあります有限会社松月庵の取締役でいらっしゃり、江戸そば本来の製品技術に精通されておられる方です。季節により変化するそば粉の状態に応じ、腰と香りを引き立てることのできるそば打ちの方法、工夫や、かつおぶしを一本一本、手で削って、だしを取って作る伝統的なそばつゆの製法など、昔ながらの江戸そばの味と技術を現代に伝え続けておられます。

続きまして、藤本智美さんでいらっしゃいます。職種は洋菓子製造となります。

藤本さんは、麻生区万福寺にある株式会社Toshimi Fujimoto、店舗名はパティスリーエチエンヌの代表取締役でいらっしゃいます。洋菓子の製作に必要な審美眼や味覚、食感などの調整技術を高い水準で持ち、四季折々の果物を使用したケーキやシロップ、ジュレなど、全国各地の生産農家や川崎市内の農家とのつながりも持って、素材のよさを生かした商品の開発にも力を入れておられる方でございます。

以上、皆様方の職種は様々でございますけれども、いずれもその分野で長年にわたる錬磨と精進を重ねられ、高度な技術・技能を身につけられた方ばかりでございます。長年にわたる研鑽によりその道を極められ、後進の目標となられた皆様の御努力に敬意を表するとともに、皆様の持つ匠の技が市民生活のさらなる発展や、次世代のものづくりの振興にしっかりと生かされますことを大いに期待しております。

本日、かわさきマイスターに認定された皆様には、今後ともすばらしい匠の技を生かし、市内最高峰の技術・技能者として、引き続きものづくり都市川崎を支えていただくようお願い申し上げます、私からの紹介とさせていただきたいと思っております。

【司会】 続きまして、今年度、かわさきマイスターに認定された皆様から、一言ず

つ御挨拶をいただきます。かわさきマイスターに認定された皆様は、お名前をお呼びしますので、演台にて御挨拶をお願いいたします。

初めに、小林政春様、お願いいたします。

【小林様】 小林植木の小林です。九州の長崎から父の出稼ぎで出てきたんですが、どうも人と馴染めなくて、自然との触れ合いの中で植木屋になりました。植木を育てている中でやっぱり新しく新芽が出てくる美しさとか、それに魅了され、今でも努力していますが、子供と同じようになかなか思うように育たないのがちょっと難しいところですが、もう少し頑張ってみたいと思っています。よろしくお願いします。(拍手)

【司会】 ありがとうございます。

続きまして、清水達也様、お願いいたします。

【清水様】 坂本塗装工業所の清水達也と申します。

川崎の産業道路のところに浅野町工業団地とありますけれども、その中でやっております。それで、無我夢中で塗装一筋でやってまいりまして、ほとんどもう仕事一筋なので、家族とかほっぽらかしちゃってやっていました。今後は、技術を若い人とかに伝えていけたらなと思っております。よろしくお願いします。(拍手)

【司会】 ありがとうございます。

続きまして、須山守様、お願いいたします。

【須山様】 こんにちは。川崎大師道参道の角でそば屋をやっています。松月庵の店主、須山と申します。

大師でそば屋をということで、代々、僕で4代目になります。もう100年以上の歴史の中で、4代目で、「おまえ、継ぐのか」と言われたときに、後継ぎは楽でいいやと思って継いだんですけども、時代の流れ、そして、飲食の流れが大きく変わる中で、やっぱり試行錯誤しながら、本当に何が必要かと言ったときに、やっぱり一から本当に親から教わったこと、そして、そばをもう一度、一から学ぶこと、この大切さを一生懸命学びながら今日に至りました。まだ62ですけども、職人としては本当にひよっこなんで、まだまだこれから先、勉強していきたいと思っておりますので、これからもよろしくをお願いいたします。(拍手)

【司会】 ありがとうございます。

続きまして、藤本智美様、お願いいたします。

【藤本様】 麻生区の新百合ヶ丘で洋菓子製造・経営をやらさせていただいています。藤本智美です。店舗名パティスリーエチエンヌです。

僕は今、50歳なんですけど、小さい頃、ものづくりが好きで、食べる物ですね。

でも、洋菓子に興味を持ち始めたのは、20年ぐらい前です、実は。もう30年、今やっていますけど、須山さんもおっしゃっていたんですけど、終着点がないんですよ。なので、僕は職人なのかなと思って。職人さん、皆さんすごく大変だとは思いますが、最後ぐらいの年なんですかね。職人、職人というのはもう死語になってきていますが、やっぱり僕はそれを守っていきたいなど。追求はなかなかできないんですけど、時代が時代なので。ただ、その中でものづくりというのは大事にしていきたい。地域の振興、振興が何なのかまだ分かりません、僕もひよっこなので。60になって終わりなのかといたら、終わりじゃないです。70、80までなんですかね。多分死ぬまでずっとお菓子のことを考えているのかなとは思いますが、精進していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。(拍手)

【司会】 それでは、ここで質疑応答に入らせていただきます。

なお、市政一般につきましては、本件終了後、改めてお受けさせていただきます。

進行につきましては、幹事様、よろしくお願いいたします。

【幹事社】 幹事社です。

今回、選ばれた4者について、今、コロナ禍で大変厳しい状況ではありますが、改めてこのマイスターの制度について、市長の考えをお聞かせください。

【市長】 お一人ずつ本当に短い時間だったので、なかなか伝わりづらいと思うんですけど、私は審査委員長から直接、それぞれの技術がどんなにすばらしいかというのを詳しく伺いました。どれも本当に、ああ、そんなに奥深いのかと。奥深い技術があると。そして、それだけ高い技術があるということは、本当に川崎の宝だなということを思いました。

皆さんそれぞれおっしゃっていることが、これが職人氣質というのでしょうか。これだけ技を極められた方が実に謙虚で、さらに高みを目指そうとされていることに心からの敬意を表したいと思えますし、この技術をさらに高められ、また、後進の人たちにそれを引き継いでいただくということに、ぜひ期待をこれからもしたいなというふうに思っております。

【幹事社】 ありがとうございます。

【幹事社】 幹事社です。

4方に、それぞれマイスターに認定されたその喜びの声というのを一言ずつお願いできればと思います。

【小林様】 喜びの声ですね。人前に出るのが得意じゃなかったのが、こういうところへ選ばれたことはとてもうれしいと思います。私が持っているものを全て、みんな

残していきたいかなというのがありますね。今までの職人は意外と人には教えない。盗んで覚えるようなところがあったんですけど、今の時代、ある程度教えながらやっていかなきゃいけないのかなと思って、それで努力をしていきたいと思っています。

【清水様】 やはりお客さんからは、清水さん、腕がいいとかと言われるんですが、その後ろ盾がないんですね。このたび、このマイスター制度に認定していただいて、何か後ろから後押ししていただくような感じ、それをこれから、何というんですかね。それを糧にまたもっともっと高みを目指していきたいと思います。

【須山様】 あくまでも私見なんですけど、そば屋の職人というのは、いわゆる和食の世界で懐石とか、割烹をやっている人間たちと、ある意味で、だしの取り方や包丁の使い方が全然変わってきます。私どもの店でそういう修業に来る中で、和食、特にそういう有名どころから修業に来て、そばを覚えたいという若い子たちが来ると、そばをすごくばかにするんですね。それは何でかという、物すごくシンプルであり、包丁の使い方もまた別であり、粉と常に対峙していかなきゃいけないんで、毎日が非常に単調な仕事になってきます。ですので、和食の職人と言われながらも、そば屋の職人というのは、和食の職人よりちょっと一步、コンプレックスを抱いた、ちょっと気持ちに引いた部分があって、刺身包丁をうまく引ける職人や、一瞬にしてだしを取る職人たちに対しての羨望みたいなものがあります。

でも、僕たちそば屋の人間たちというのは、そのシンプルの中で物すごい複雑性を求めて頑張っていきたいと常に感じているんですね。ですので、こういう賞を頂いたときに、同じ仲間たちがもっと一緒に頑張れる一つの礎になるんじゃないかと思いました。

以上です。

【藤本様】 今回、マイスターに認定していただきまして、すごくうれしいんですけど、正直、それが何なのかという部分が僕にはまだ理解ができなくて、1つの通過点で、これは当たり前なことなんだなという部分しかないんです、実は。高飛車になっているわけじゃないんですけど、もちろんそれを戒めとして守っていかなければいけない。認められたということはそれを守らなければいけない。僕自身がこのようなキャリアを持っていて、伝えていくべき1つの武器だと思っています。なので、これで終着点じゃないので、1つの武器を手に入れたと思って、あと戒めとして、今後、精進していきたいということのみですかね。

【幹事社】 ありがとうございます。

幹事社としては以上ですので、各社さん、どうぞ。

【記者】 4人の皆さんにお尋ねしたいんですが、職人の世界、匠の世界という、特にコロナというのは、今までと違った工夫だったり、御苦労だったりということがあるのか、ないのかということからなんですけれども、何かコロナでこういう工夫をしている、こういうところで苦労した、そんなものがもしあったら、紹介してほしいんです。

【小林様】 今ちょっと無駄かなと思うんですけど、移動の際に特定の人たちだけで動くような、例えば軽トラで、車1台で行けばいいんですが、軽トラ2台とか3台重なって行くように。それは結局、人との関連を減らすようにとか、そういうのというのは特にありますよね。今、特にZoomとか、いろいろなことで、私たちのところも日報をやめて、結局、パソコン上の日報にしてきているということで、なかなか僕らのアナログの時代の人間には難しいところがあって、でも、それも時代性かなと思っています。

ちょっと何年か前からルンバって、芝刈りルンバ、ロボットを入れているんですけど、何台か。結局こういうときには機械っていいのかなと思ったりしますね。今まで人間の手で芝を刈っていたことが、やっぱりそこでちょっと人間の移動が減るとか。剪定自体はもうどうしても行かなくてはいけないんですけどね。そんな感じです。

【清水様】 ほとんどが現場作業、工場の中での現場作業なものですから、リモートとか、そういう世界とは程遠いんですね。ですから、やっているとすれば、やっぱりアルバイトの人の時間を短くするとか、終わりの時間を変えると、そういうレベルでしか工場の対策ってなかなかしづらいんですね。リモートでできる仕事でしたらいいんですけどもともと塗装工場なんで、換気は物すごいいいんですね。それで人もこの御時世で少ないものですから、間隔がもうかなり空いていますので、それで何とか。特に特段の対策はしておりません。

【須山様】 コロナで春先に非常事態宣言が出たときに、私どもの店に、1人、若い職人を育てようと思って募集をかけたんですね。でも、こういう状況の中で人を雇うことができなかったので、残っている職人と一生懸命、作っていたんですけども、一番憂うのは、やっぱり飲食という技術の中で、高い水準を維持するためにはやっぱり若い世代を育てなきゃいけないんですけども、こういうコロナ禍で、そういう雇用ができない分、若い世代を育てることができないんですね。ですので、飲食の中で一番憂えているのは、やっぱり自分たちの持っている技術を若い世代につなぐということができなくなってきている。それは、すなわち日本のいわゆる伝統の文化というものが継承できなくなってきているんですね。

非常事態宣言がある程度解除されて、お客さんが少し戻ったときに、職人たちと一番最初に感激したのは、お客さんが戻ってきたときに、おそばが足らなくて、追い打ちというんですけれども、俺たちは追っかけで、午後、打つんですね。そのとき、みんな泣きました。本当に自分たちの作ったそばをわざわざこのコロナのリスクを越えてまでも来てくれるお客さんに対して、滑らず、きちんともものを作っていくことをみんなで頑張ろうよと言いながら今日までやってきました。

以上です。

【藤本様】 コロナの対策なんですけど、やはり入店制限だとか、皆さんやられているような換気だとか、そういう部分でしかできない。逆にできることはやっている。もちろん会話というのを少なくする。会話を少なくするんですけど、コミュニケーションを取らなきゃいけない。なので、マスク着用を義務づけているだとか、接客業なので、販売員、手洗いの励行だったりとか、やはり常にそのような当たり前のことを当たり前にするという以外できないので、逆に、そのように僕を含めスタッフがなったときにどのような対応しなきゃいけないかのほうがすごくびくびくしながら、今、やっているかなという部分で、やはりそうなったときに、保健所にとか相談をしに行くとかというふうなことになっているんですけど、お店としてどのような対応か個々のお店さんによって違うとは思いますが、その部分をびくびくしながらやってきたかなと。

今は違います。そういうふうにはやっても、どうしても物に出してしまうので、ケーキだとか、そういうものに迷いが出てしまうので、もう思いきり、今までどおり楽しく、厳しくやっています。

【記者】 ありがとうございます。

【市長】 どうぞ。

【記者】 このたびはおめでとうございます。

皆さんも後進の育成にも御尽力されているということなんですけれども、匠と呼ばれる皆様のお立場から、後輩で今、頑張っている人だったりとか、同じ職業を目指している方に向けたお言葉というのは、どういった言葉があるか聞かせていただけますか。

【小林様】 そうですね。私なんか、植木の剪定とか、そういうことは子育てと同じようなところがあって、あまり細かく言い過ぎちゃうと萎縮して、なかなかできない。ある程度目を離してあげて、伸び伸び育ててあげないといけないのかなというのがあるんですよ。先ほどもちょっと話したんですけど、木をいつも手をかけ過ぎている

と、伸びたいという枝が伸びなくなっちゃって、そのまま萎縮していつちゃうんですよね。それは伸びなければ、根っこも張らないのでね、バランス的に。だから、やっぱりそういう目で、ちょっとやんちゃな感じでいいかなとは思っています。そんな感じで育てています。

【清水様】 今、若い作業者と私の息子が社内で修業していますけれども、私のところは塗装工場なんです。それで汚いとか、汚れるとか、そういうこともあるんですけども、デスクワークとか、そういうデザイナーとか、そういうのもいいんですけども、実際に工場で作って、その楽しさというのを知るような若い人というのもいたらいいなと思うんです。1個、自分の思いどおりに物ができるとすごく楽しいですよ。やっていると、それが一番仕事としてはいいんじゃないかな。そのように思います。

【須山様】 そば屋というのは意外と家族経営が非常に多いので、やっぱり僕も4代目として3代目の父親からいろいろなことを教わりましたけれども、いきなりあれや、これやれと言われて、失敗するんですね。よく空の1斗缶でぶん殴られたり、あと、ひしゃくですね。そば、よく軽アルミのひしゃくを使うんですけど、それでひっぱたかれるとアルミに頭の形でへこむんですね。そんなスパルタ的なことをずっとたたき込まれてやってたんですけど、やっぱり若い子たちというのは、今、そういうスパルタというのは全く通用しませんので、ただ、こっちがそういうふうに厳しいことを言うと、やっぱりほとんどは去っていつちゃうんですね。そういう苦い思いを何度も何度もしているんで、今、最近になって自分がすごく思うのは、自由にやらせています。失敗したときのリカバーを教える。失敗すればするほどうまくなるんで、逆に失敗をさせて、受け入れて、リカバーの方法を教えると、相手は僕に対してリスペクトをしてきます。こんなふうに直せばいいんだよ、こんなふうに変えればいいんだよということなんで、若い子を育てるには、なるだけ失敗を受け入れてあげることだと思っています。

【藤本様】 育成なんですけど、やはり須山さんがおっしゃったようにやっていますかね。ただ、怒ってます。すごく怒ってます。昔は殴られたり、蹴ったりとか、僕の時代でもありました。こいつだけはもう、その年齢になったときに越えてやるという、やっぱりそこだけしかなかったんですけど、今、そこは求めてはないです。

ただし、入ってきた子たちに言うのは、やったらやっただけの世界なので、とにかく興味を持ちなさいと。何でもいから興味を持ちなさいと。空を見上げなさい、空は青いよねと。次の日にも空を見上げなさいと。その青さが違うでしょう。雲がある

でしょう。どう感じるかとか、新緑の季節は緑がきれいで、紅葉の季節はやっぱり落ち葉一つでもすごくきれいなんですよ。なので、それを感じられるか感じられないか。今日、寒いよねと。外の風がどのように冷たいのかとかによって、やはり室内がどういうふうになっていくか、湿気もそうなんですけど、とにかく感じて、興味を持ちなさいと。それを持つことによって10年後、15年後、20年後に、分の1にならなくて済む。100人いたら、200人いたら、1,000人いたら、999人同じ方向を向いていても、1人だけ違う方向を向いている人間になりなさいと。考え方は一緒でも構わないから、ぶっち切った考え方、己が道を進みなさいというのをすごく教えていますかね。

【記者】 ありがとうございます。

【司会】 そのほかいかがでしょうか。御質問のほうはよろしいでしょうか。

ありがとうございました。

最後に写真撮影のお時間とさせていただきます。マイスターの皆様、市長におかれましては、中央にお集まりください。

(写真撮影)

【司会】 よろしいでしょうか。

それでは、写真撮影につきましては、以上で終了とさせていただきます。ありがとうございました。

以上をもちまして、本件については終了といたします。ここでマイスターの皆様は退室をされます。

なお、マイスターの皆様の製品や写真につきましては、後ほど後方のテーブルのほうに置いてありますので、また御覧いただければと思います。

それでは、レイアウト変更をしますので、もう少々お待ちください。

《市政一般》

《今年の漢字について》

【司会】 それでは、続きまして、市政一般に関する質疑応答をお願いいたします。

進行につきましては、幹事社様、よろしくをお願いいたします。

【幹事社】 幹事社でございます。よろしくをお願いいたします。

国のほうで、今年の漢字一文字が発表されました。「密」という漢字が出ましたけれども、福田市長のほうで、もし今年の漢字一文字というのを考えられているようでしたら、教えていただきたいんですが。

【市長】 すみません。何か毎年のごとで、ちゃんと仕込まれておりまして。

毎回恥をさらすようで。

【幹事社】 その漢字を選ばれた理由を。

【市長】 今年は感染拡大防止にもう明け暮れた1年だったというふうに思いますし、そういう意味での感染の「感」、それから、医療従事者はじめエッセンシャルワーカーの人たちに感謝するという意味での感謝の「感」、それから、昨日もそうでありましたけれども、フロンターレのJ1リーグ優勝をはじめ、それだけではないですけど、スポーツだけではない、文化の面でも、本当にこの厳しい時代にスポーツ・文化の力でみんなを元気づけようというふうな、そういった感動の瞬間というのが幾つもありました。その感動の「感」と。ですから、感染、感謝、それから、感動、この3つの「感」という意味で、この「感」という字を選びました。

【幹事社】 ありがとうございます。

《新型コロナウイルス感染症について》

【幹事社】 今のこの感染にもちょっと関係があるんですが、最近、やはり川崎市内でも患者数が高水準でずっと続いておりまして、現在の感染状況について、病床も含めた現在の御所感をまずお願いします。

【市長】 そうですね。引き続き感染が高止まっているというか、高水準が続いているということに非常に危機感を持っております。今日の本部会議でも申し上げましたが、130まで用意した即応病床というのが大体80台後半から90台前半というところというのをこの1週間ずっと続けているという状況でありますので、これは、これからの時期、特に脳疾患だとか、心疾患だとか、そういったところで重篤な患者さんが出てまいりますので、そういったところの通常の医療とのバランスというのは非常に難しい状況になってきているというふうに思っています。

ですから、これまでも我慢の3週間だとかというのがいろいろ言われておりましたけれども、引き続きぜひ基本を守っていただくということが何よりも大事、もう聞き飽きたということなんですけれども、聞き飽きたということでも、しかし、少し緩みがあるというのは、皆さん町の中に出てお感じになっているところだと思います。ですから、基礎、基本のところ徹底してということによって、この医療の危機的な状況を招かないような、という状況にしていけないと年末年始、特に医療が通常でも手薄になってくるところというのを乗り越えることができないので、ぜひ皆さんの御協力をいただきたいと思っております。

【幹事社】 それで、今のちょっと緩んできているような部分があるということかと思うんですけれども、やっぱり町に結構、人がそんなに減ってないような気がするん

ですけど、川崎も。その辺について、年末年始でいろいろ会食したりとか、そういう機会が例年だと増える時期に向けて、市民へのメッセージというのをお願いします。

【市長】 そうですね。全ての行動を規制してくださいということではないんですが、やはり静かに過ごしていただくということが大事かなと。少人数で静かにということを守っていただきたいと思います。だから、大人数で、逆を返せば、大人数でどんちゃんやらないというのが今年の年末年始の過ごし方ということだと思います。

【幹事社】 ありがとうございます。

幹事社から以上です。各社さん、どうぞ。

【幹事社】 すみません。

【市長】 どうぞ。

【幹事社】 今日の午前中のコロナの対策会議で、岡部先生から、岡部所長からコロナのワクチンの状況についての説明があったと思います。その中で、早ければ3月頃をめどに医療従事者からのワクチンの接種が始まると、早ければですね。というような話があったかと思いますが、このワクチンの状況について、今、市長の受け止めはいかがでしょうか。

【市長】 そうですね。非常に国民の関心の高いところだと思いますし、川崎市でも本当に市民の皆さん、いつ接種できるのというふうに。一方で、不安に思っている方も多いと思いますが、いち早く、安全に、確実にワクチン接種ができるように体制を整えていくということで、実際は1月1日発令でもって体制を組むことにしていますが、その前倒しで、既に体制の準備は進めておりますので、万全を期して取りかかりたいというふうに思っています。いずれにしても、これだけ大規模なワクチンの接種ということは、いまだ経験したことがない大事業になると思いますので、混乱を来さないようにしっかりと準備をやりたいと思っています。

【幹事社】 ありがとうございます。

【司会】 そのほかいかがでしょうか。

《川崎フロンターレ中村憲剛選手について》

【記者】 すみません。

先ほどおっしゃっておられたフロンターレの中村憲剛選手なんですけれども、昨日、引退セレモニーがありまして、市長、あれだけピッチ外で川崎に貢献してくれた方ですが、今後、何か、まだはっきりと明言は今後のことをされてないと思うんです、御本人の口からは。ですけれども、もし市長がお望みの、川崎にこういう形で関わってほしいですか、何か今、彼に関する思いというのはありますか。

【市長】 昨日の挨拶でも申し上げたんですが、また現役選手とは違う関わり方を川崎としてほしいというふうをお願いしたので、どんな関わり方があるのかというのは、御本人も次のステージに行くというふうに言われて、また、新たな挑戦をし始めるんでしょうから、その中には川崎があってほしいというふうに、挑戦の中に川崎があってほしいということを強く願っています。

【記者】 ありがとうございます。

【司会】 ほかいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上で本日の記者会見を終了とさせていただきます。ありがとうございました。

(以上)

・この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理した上で掲載しています。

(お問合せ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355